

慢性胆嚢炎にみられる化生性変化と内分泌細胞, リゾチーム, ラクトフェリン出現との関連性:  
全割切片による検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/14832">http://hdl.handle.net/2297/14832</a>

学位授与番号	医博乙第 1078 号
学位授与年月日	平成 2 年 1 月 17 日
氏 名	林 守 源
学位論文題目	慢性胆嚢炎にみられる化生性変化と内分泌細胞、リゾチーム、ラクトフェリン 出現との関連性：全割切片による検討
論文審査委員	主 査 中 沼 安 二 副 査 中 西 功 夫 松 原 藤 継

### 内容の要旨および審査の結果の要旨

慢性胆嚢炎では粘液腺化生、杯細胞化生などの化生性変化が認められるが、その病的意義や他の粘膜病変との関連性について不明な点が多い。そこで著者は、外科的に切除された100例の胆嚢（全例、組織学的に慢性胆嚢炎をみる）の全割切片を作製し、ルーチンの染色、組織化学的検索、9種のホルモン、リゾチーム、ラクトフェリンの免疫染色を行い、粘膜面での化生性変化、内分泌細胞、各種のホルモン、リゾチーム、ラクトフェリンの出現を各々マッピングし、相互の関連性を検討した。得られた成績は以下の如くである。

(1) 化生性変化は100例中89例に認められた。粘液腺化生と杯細胞化生の分布は必ずしも一致せず、別々に出現する可能性が示唆された。粘膜腺化生は胆嚢底部に出現する傾向があったが、杯細胞化生は一定の分布傾向を示さなかった。(2) 化生性変化の分布の検討より、化生性変化は単中心性に発生するものと、多中心性に発生するものがあった。(3) 化生の程度を化生指数（化生性変化を有する標本数/全標本数×100）で検討すると、杯細胞型は軽度例（指数が33以下）に多く、混合型は高度例（同67以上）に多く、粘液腺型は軽度例と中等度＋高度例がほぼ同数であった。(4) グリメリウス染色、フォンタナマッソン染色、9種のホルモンの免疫染色のいずれか1つが陽性の内分泌細胞は50例にみられた。含有するホルモンはセロトニンが最も多く、次いでコレシストキニン、ソマトスタチン、ガストリンの順であった。内分泌細胞は、化生、特に粘膜腺化生に関連して、出現する傾向があった。(5) リゾチームは化生性病変に付随して出現したが、ラクトフェリンと化生性変化との間に関連性はなかった。

以上、本論文は、多数の胆嚢の全割切片を作製し、胆嚢粘膜面での各種の病変をマッピングにより詳細に対比検討したものであり、慢性胆嚢炎の病態解明に多くの知見をもたらした労作と評価された。